－所蔵作品紹介－

須田　賢司　SUDA Kenji

楓嵌装箱一双「二都物語」

かえでがんそうばこいっそう「にとものがたり」

作品データはこちら

須田賢司は、祖父・須田桑月から続く木工家の三代目として東京に生まれ、東京都立工芸高等学校卒業後、父・須田桑翠の下で木工芸技術を学んだ。1975年、第22回日本伝統工芸展に初入選、以降、同展を中心に作品を発表。2014年には、「木工芸」重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、伝統的技法・価値観を後世に継承すべく後進の育成にも熱心に取り組んでいる。

須田は、平成20年度、文化庁から文化交流使に指名され、翌年３月、ニュージーランドを訪問し、複数の都市で講演やワークショップを行った。本作は、滞在中に作品制作のデモンストレーションとして作業を始め、帰国後、作品の一部に現地の材料を使って完成させたもの。どちらも主材となっているのは楓だが、一つは、そのままの白さを生かして生地仕上げし、白蝶貝の小円を象嵌、もう一方は、黒漆の拭漆にニュージーランド特産のパウア貝(Paua-shell) と白蝶貝をストライプに象嵌し、対照を際立たせている。

どちらも中箱には、ニュージーランドのカヒカテア (kahikatea)材を用いている。須田は、ニュージーランドに行く前から、せっかく外国に行くのだから、現地の材を使って作品を作りたいと考えていた。南島のネルソンの木工学校を訪問したときに出会ったのがカヒカテアだった。茶色い縞模様が特徴で、欧米の作家はその変化を好んで工芸品に使うが、通常日本ではこのような部分はシミのように見えるので好まれない。しかし一度そうした材に挑戦してみたいと考えていた須田は、カヒカテアをニュージーランドを象徴するものとして中箱に使った。この中箱の覆輪（ふくりん）には赤みの強い梨材を、また台輪（だいわ）と縁には、南米のジリコテとアフリカのグラナディラ、それぞれ外国産の材を用いている。国内外の材を研究の上、作品に取り入れるのも須田の特徴である。

須田は、出発前から二つの箱を一対にして両国を表そうと考えており、楓による同じ形の箱でありながら趣の異なる２つで一対の作品とした。《二都物語》という作品名は、日本とニュージーランドの二つの国を象徴するものとして名付けた。カヒカテアを使った中箱の内部には、「海に囲まれた」両国にあわせて流水文様の和紙が貼られている。本作は、当館の開館40周年を記念してボランティア常磐会から寄贈された。

旭川美術館だより「氷華」No.65（2023.３発行）「収蔵品から」より